

3 . まとめ

今回の調査結果は、研究の進展状況は実際どうなのか？研究者は何に興味を抱いているのか？研究費用に対する思いはどうなのか？といった研究現場の率直な状況、現場の生の声を反映していると言える。

3 . 1 助成テーマの活用について

助成テーマが具体的な形で社会に役立ったケースは、2章 2.2.7 の対社会の貢献で触れた様に5件と少なかった。その反面、2章 2.2.6 今後の見通しでの課題や 2.3.3 の財団への期待からも言える事は、成果を挙げつつある研究者が共同で研究を促進できるグループや企業を求めている現状である。成果を上げる可能性が有りながら良き協力者が得られないで中断に追い込まれてしまうのでは如何にも惜しい。各大学で産学共同研究の場が始動しているが、その一層の促進が研究サイドからも要望されている。

3 . 2 助成対象者の研究方向

2章 2.2.8 の結果から総じて言える事は、研究の分野が広がり複合化していくと推察される。研究者の興味は“人間が音をどの様に感じているのか...”に比重が移り、脳との関わりをターゲットにしはじめている。この様な複合化の傾向は音声分野の申請にも見られ、従来の分析・合成・圧縮・認識に属さないテーマが増加して来ている。

3 . 3 研究室の訪問取材

訪問調査の良い点は、実際に現場に踏み込み、装置を前に研究者から直に説明してもらうと、研究の全体像が実感を伴って把握できる事であろう。これはアンケート調査では得られない決定的な違いである。アンケートに何気なく記載されているコメントが、現場に行ってみると重要な意味があったりする。

今回は、2章 2.1.1 で説明したように、平成4~6年度の助成テーマ18件に関して、研究室を訪問してその後の研究開発状況の追跡調査を行なった。訪問調査の結果はアンケートと同じレベルでも取材しているので、今回の調査に生かしている。

実際に訪問して状況説明を聴くと、十人十色という喩えは研究室にも当てはまる。助成研究を核として研究が発展しているケース、既に終了もしくは中断しているケース、又幾つかの研究室を抱えて設備も資金も潤沢なケース、或いはその逆のケースなど様々であった。実際に試作した設備・物を見たり、音として聴いたり、デモを見る等を通じて活動状況、研究段階、発展性等良く理解できた。

訪問した中には、

- ・研究成果が新聞紙上で大きく取り上げられていたり
- ・企業との共同研究へと発展しており、新技術の開発に貢献していることが分かったり

- ・休日も取れない基礎研究の大変さが伝わってきたり
- ・院生に任せてあるので進展が思わしくなかったり

と様々であった。

3.4 研究助成制度について

今回の研究助成制度の調査では、研究者達が扱いにくい資金、換言すれば、使途の制約が多くて小回りの効かない資金を、しかも短期間で使わなければならない現状が浮かび上がった。大切な資金でありながら効率の良くない使い方を強いられている現状である。同額ならば当財団の助成金ははるかに使い度があるとの指摘も数件あった。2章 2.3.1~2の結果はこの事を明確に示している。又、全体を通じて読み取れる事は、陰に隠れて地味ではあるが独創的な研究を進める若手の研究者にもっと光を当てて欲しいという切実な願いであろう。

音の研究は元々地味な分野と言われ、研究費が潤沢に注ぎ込まれるという訳でもない。その様な現状において、当財団の助成金は自由性の高い研究資金を堅持し、又若手研究者にも比較的バランス良く助成されている。(1章 1.2 図 1.2.1 参照)

以上の様な活動が2章 2.3.3の財団への期待において、研究活動に対する潤滑剤としての当財団の役割評価につながったと考えられる。

3.5 おわりに

今回の調査では、研究者が助成テーマ或いは興味有る研究テーマに関して、どの様な意識・将来展望を持っているか、又助成金に対してどんな感想を持っているか等、広範囲な見解が把握できた。そして、当財団の研究助成の事業活動に対する率直な見方が明らかになった。

今後は調査結果から得たものを踏まえて、更にサウンド研究の潤滑剤としての役割を一層高め、音に関する技術の振興に寄与していく事が当財団の主要な任務の一つと言える。

最後に、この調査で明らかになった事象は日本の大学等の研究現場が抱える問題の縮図という側面も忘れてはならない。研究者の声を反映した課題提起とも読み取れよう。